

オープンキャンパスの目的をふまえた体験授業のあり方について

浅原 知恵

要 旨

本稿は、オープンキャンパスにおける体験授業のあり方についての試案を呈示するものである。まず、オープンキャンパスの目的を、大学、来場者、在学生の3つの観点から記述し、整理した。次に、オープンキャンパスの目的に適った体験授業とするためには、体験授業で「何を」めざすのか、「どのように」伝えると効果的か、「どのような教員が」伝えるかについて論じた。最後に、教員が、体験授業というタスクの内に、広報ではなく教育機会としての意義を見出すことが、心的葛藤の緩和と授業の質の向上につながる可能性に言及した。

キーワード：オープンキャンパス、体験授業、模擬授業

1. はじめに

体験授業は、大学オープンキャンパスでしばしば提供されるプログラムの一つである。進学先を検討中の高校生やその保護者が、入学後の学びを具体的にイメージできるよう、大学の授業内容を体験してもらうための機会である。大学によって、あるいは文献によって、「模擬授業」と「体験授業」の語が混在して用いられているが、両者は、実際の大学の授業を「模した」授業であるという意味に着目するか、来場者の「体験」という面に着目するかの違いであり、同一のイベントを指していると考えてよいだろう。本稿では、「体験授業」の語を使用することとする。

体験授業についての論考は多くはない。試みにCiNii Researchで検索すると、2022年8月現在、「オープンキャンパス」と「模擬授業」の組み合わせで7件、「オープンキャンパス」と「体験授業」の組み合わせで5件がヒットするのみである。担当する大学教員の立場から見ると、体験授業は、本業である研究・教育の合間に課される業

務（負担）の1つであり、正規の授業とは対象も目的も異なるため、学術的な議論に値するとはとらえにくいことが一因であろう。

しかしながら、仮にも「授業」と名のつくタスクであり、「大学教員」が提供しているプログラムであることから、体験授業のねらいや方法について議論・検討する機会があってもよいのではないだろうか。

本稿は、以上の問題意識に基づき、オープンキャンパスの目的、来場者のニーズを整理し、それらをふまえて、オープンキャンパスにおける体験授業のあり方についての試案を呈示するものである。

2. オープンキャンパスの3つの目的：誰のためのイベントか

オープンキャンパスの成り立ちについては小島(2010a)に詳しい。オープンキャンパスとは、受験生を対象とした大学内での進学相談会の総称であり、1978年の立教大学の「進学相談会」に始

まり、1988年には「オープンキャンパス」の語が生まれ、1990年代半ばには一般化したとのことである。2000年代には、いわゆる難関校と呼ばれる大学でも開催されるようになった(勝田, 2016)。

このオープンキャンパスの開催目的については、①大学、②来場者、③在学生、という3つの観点から記述することができる。

2.1 大学にとっての目的

18歳人口の減少で、46%もの私立大学が定員割れ(河合塾KeiNet, 2021)をしているという切迫した状況の中、各大学は学生募集戦略にしを削っている。大学にとってオープンキャンパスは、学生募集のための重要な広報活動の一部であり、その究極の目的は、入学志願者の増加・入学者数の確保である。

そのために、自校の教育の特徴や、社会的存在意義や役割を見直し、詳しく正確に受験生に伝えること(小島, 2010a)がより具体的な目的であり、こうした努力が入学後のミスマッチを防ぐ(勝田, 2016)ことにもつながる。

小島(2010b)によれば、中には、高額なプレゼントなどの過剰とも言えるサービスによってオープンキャンパスへの来場者を増やすこと自体が目的化している場合も見受けられるようである。その一因として、本来伝えるべき自校の魅力や社会的役割について、当事者である教職員自身が自覚的でなかったり、自信を持てなかったりすることが考えられる。人目をひきやすい賑やかしやお得感の演出は、認知度を高め、参加者を増やす手段としては有効だが、オープンキャンパス本来の目的を見失うことがないよう留意すべきだろう。

2.2 来場者にとっての目的

主たる来場者である高校生とその保護者にとって、オープンキャンパス参加の目的は、進路選択という意思決定に必要な情報を得ることである。

必要とする情報(いわゆるニーズ)やその重要度は人それぞれであるものの、いくつかの調査から一般的な傾向をうかがい知ることができる。

表1に示したのは、高校生の大学選択理由に関連すると思われる近年の調査の主な結果である。このほか、ベネッセ教育総合研究所(2013)が全国の高校生1181名に「大学選択の際に重視する大学の特徴」として15項目を調査し、進学目的別に分析している。表1に示された諸項目と共通する内容も多いが、それらの他に、平均して50%前後の高校生が重視している項目として以下の内容があげられていた。

- ・専門的な職業に就くための支援が優れていること(54.7%)
- ・学問的研究が優れており、最先端の学問が学べる大学であること(46.9%)
- ・講義だけでなく、グループワークや実習ゼミなどの能動的な教育が充実していること(48.1%)
- ・入学後に、就きたい職業や将来やりたいことを見つけるための支援が充実していること(49.0%)
- ・その中で、人間的に鍛えられ、成長できそうな大学であること(49.7%)

表1及び上記の項目のうち、ネームバリューや立地、また地元からの通学可能性、本人の学力については、オープンキャンパスで大学側が提供する情報の範囲外である。また学費・奨学金、施設・設備などについては、オープンキャンパスで、最新の正確な情報を来場者に提供する必要があるが、それらが来場者の期待と異なっていたとしても、短期的な変化・対応は不可能な固定的な要因である。

一方その他の項目については、オープンキャンパスでの情報提供のあり方が、来場者の進路選択を左右する可能性がある。それらを大別すると、

①学びに関する情報（学びたいことが学べる／能動的な教育の充実、など）、②人間関係・雰囲気に関する情報（良き友、豊かな人間関係／雰囲気の良さ／人間的成長など）、③キャリア形成の支援と就職に関する情報（就職のための支援／やりたいことを見つけるための支援など）の3つに分類・集約することができるだろう。来場者の視点でより具体的に述べるならば、高校生と保護者の多くがオープンキャンパスで知りたいと願っているのは、以下の3つの内容であると推測できる。

①アクティブラーニングでの学びを通して、知識や技能を身につけることができそうか。

②良い友達、先輩、教員と出会い、よい雰囲気の中で充実したキャンパスライフを送ることができそうか。

③キャリア形成のための支援が充実しており、望ましい職に就くことができそうか。

①のアクティブラーニング、②の雰囲気に関するニーズは、「楽しさ」（楽しく学び、楽しく過ごすこと）を重視していることの表れだと考えられる。来場者は、①②③全てへの回答が「YES」であった時、すなわち自分（または子ども）が、楽しく学び、楽しく過ごす数年を経て、知的にも人間的にも成長し、その結果として就職できそうだと見通しを持てた時、この大学なら「安心して学ぶことができる」「安心して子どもを任せることが出来る」と感じるだろう。その意味では、来場者にとってのオープンキャンパスの目的は、直接的には「情報」であるが、本質的には、キャンパスライフの「楽しさ」を体験することによる「安心感」と言ってもよいだろう。そのような「楽しさ」と「安心感」を提供することができた大学は、進学先の有力な候補となると考えられる。

2.3 在学生のための目的

前節で述べた来場者が求める3つの情報①②③について、最も確かな回答を示し、事実裏うち

表1 オープンキャンパス参加目的に関連する調査

【大学選びで重視する項目】	
出典	スタディプラス（2022）
対象	高1～高3のユーザー1965人
1 学びの内容	88.1%
2 ネームバリュー	56.9%
3 立地	54.5%
4 雰囲気が良いから	43.1%
5 学費・奨学金	38.1%
【大学生生活で現在最も重点をおいていること】	
出典	全国大学生協連「学生生活実態調査」（2022）
対象	全国30大学学部生10,813名
1 勉学や研究	32.7%
2 よき友を得たり、豊かな人間関係を結ぶこと	16.2%
3 部活動・サークル・同好会活動	14.1%
【オープンキャンパスではどこに注意して参加しましたか】	
出典	スタディサプリ（2021）
対象	大学生208人
1 学校・先生・先輩の雰囲気	64人
2 施設・設備	25人
3 カリキュラム	19人
4 模擬授業	9人
4 先輩の話を聞く	9人
【高校生が大学選びの際に重視すること】	
出典	学研教育総合研究所（2018）
対象	高1～高3男女600名
1 学びたいことが学べる	71.2%
2 就職に強い	28.2%
3 地元から通える	20.9%
4 自分の学力で入れる	20.3%
5 学費が安い	20.1%

された安心感を提供できるのは在學生である。在學生が互いに協力しながら生き生きと元気よく来場者に声をかけて案内したり、大学生活を紹介するプレゼンを行ったり、個別の質問に応じたりする姿は、大学の教育力と楽しく充実したキャンパスライフを示す生きた証として受け止められるだろう。

この在學生について、学生数を確保したい大学、進路選択に必要な情報を得たい来場者のために働くスタッフとしてのみ位置づけるのではなく、その経験を通じた成長を促そうとする考え方がある。たとえば小島(2010b)は、オープンキャンパスを参加者と在學者の学びと成長の場とすることを提唱している。また橋本ほか(2011)は、オープンキャンパスを在學生の社会性や自主性を育てるインフォーマルな学びの場として有効と思われることを報告している。さらに小山(2013)も在學生スタッフ(サポーターズ)の対応力の向上という観点からオープンキャンパスについて論じている。これらは、オープンキャンパスを、在學生スタッフにとっての学びの場とする視点である。

ただし在學生の学び・成長は、大学と来場者にとっての目的の実現に参与した在學生に結果的にもたらされるものであり、それらに優先して目指されるものではない。あくまで副次的な目的と言えるだろう。

3. オープンキャンパスにおける体験授業のあり方に関する試案

3.1 オープンキャンパスの目的に適った体験授業とは

前章で整理したオープンキャンパスの目的に鑑みると、オープンキャンパスにおける体験授業は、何をねらいとし、どのような点に配慮した工夫をするとよいだろうか。

副次的な目的である在學生スタッフの学び・成長は体験授業のねらいからは除外し、2.2であげた来場者にとっての目的①②③のうち特に①②を念頭におくと、オープンキャンパス時の体験授業は、何らかの形で①アクティブラーニングの要素を取り入れた「ためになる」と実感できる授業を、②高校生から見て魅力的な教員が楽しい雰囲気の中で提供することが望ましいと言えるだろう。

体験授業に求められる条件をより具体的に検討するため、高校生にとって好ましい教師像を調査した小柴ほか(2014)、細川(2015)の研究の主な結果を表2に示した。丸山(2018)が中学生を対象として行った研究でも同様の結果が得られている。次節以下では、以上をふまえて、オープンキャンパス時の体験授業は「何を」目指すのか、「どのように」伝えるのか、「どのような」教員が担当することが望ましいかについての試案を呈示する。

3.2 「何を」めざすのか：「へえ、なるほど」体験の創出

オープンキャンパスにおける体験授業は、あくまで大学の授業を模したものであって、実際の授業とは異なる。大きく異なるのが、期間・時間がきわめて限定されていることである。通常の授業は、1学期間を通した一連の授業計画の一部に位置づけられており、授業の目標は全授業回の学びを通して達成される。したがって、特定のトピックに関する内容が1回の授業内におさまらず次回以降に持ち越されることもあれば、次回までの課題としてあえて受講者に問いを投げかけて終わることもある。しかし、体験授業にわりあてられた時間は、短ければ15分程度、長くても45分程度が一般的であり、その時間内で完結するひとまとまりの内容を通してニーズに応えなくてはならない。

表2 魅力的な教師・授業に関する調査

【高校生の理想の教師像】(上位6項目)		
出典	小柴ほか(2014)	
対象	高校生2161名	5点中
1	わかりやすい授業をする先生	4.65
2	生徒とのコミュニケーションを上手にとることができる先生	4.60
3	クラスをまとめることができる先生	4.40
4	だれに対しても笑顔で明るくかかわる先生	4.29
5	授業に全力で取り組む先生	4.22
6	生徒の成長に喜びを感じる先生	4.17
【魅力的な教師像】		
出典	細川(2015)	
対象	高校2,3年生58名	
1	わかりやすい授業をしてくれる	47%
2	授業での話し方がうまくひきこまれる	41%
3	楽しい授業をやってくれ、あきさせない	38%
4	教科書の要点を記憶に残るように教えてくれる	28%
5	生徒を授業に参加させるのが上手である	26%

さらに、「大学でどんなことが学べるのかを知りたい」という来場者が、ある程度の手応えを感じ、「おもしろい」「こんな授業なら受けてみたい」と思えるためには、限られた時間内で、何かしらの「気づき」「理解」「知識」を提供できるものである必要がある。すなわち体験授業のねらいとは、これまで知らなかったことを知ることができた、気がつかなかったことに気づくことができた、既に知っていたことへの理解が深まったことによる「へえ、なるほど」体験の創出であると言えるだろう。

3.3 「どのように」伝えると効果的か：教育心理学に基づくヒント

表2を見ると、望ましい教師像に関する2つの調査の両方で第1位となっているのが「わかりやすい授業」をする教員である。また、「あきさせ

ない」ことや「記憶に残るように教えてくれる」といった項目も含まれている。「へえ、なるほど」と思ってもらうために、授業がわかりやすいことは不可欠の条件と言えるが、「わかりやすさ」に寄与しうる要因は多様で、当該授業の科目の特性によっても異なるだろう。したがって一概に論じるのは難しいが、本節では、教育心理学の知見を参照し、授業を「わかりやすく、あきさせず、記憶に残りやすく」する上で効果的と思われる一般的なアプローチをいくつか呈示してみたい。主に学習定着のための記憶研究の分野で、情報を印象づけ、記憶に残りやすくするために有効とされる方法の応用である。

①身近なテーマを選択・高校生が初めて知る言葉の使用は限定的に

人が短時間に理解し、記憶に留めることのできる情報量（「わかった」と感じられる情報量）は

限られている。また、既有知識（既知していること）と関連づけることができる、記憶に残りやすいことが知られている。したがって担当教員は、専門分野の理論、用語、現象などの中から、高校生が既に学んで知っている事柄と関連づけることができる身近なテーマを選択することが求められる。また、難解な言葉遣いを避けるだけでなく、高校生が初めて聞く言葉の使用は極力控え、話題を変転させていくよりは、1つのことを異なる側面から説明することが望ましい（15分の授業であれば、1つの専門用語や1つの現象の意味だけに焦点化して、高校生が親しみやすい具体例や映像を交えて丁寧に説明するなど）。

②参加者自身や過去の経験と「関連づけ」るよう促す

①で述べた既有知識との関連づけとは別に、新しい知識は、単に説明されただけではなく、自分に関連づけるプロセスを経ると記憶されやすくなることが実証されている（自己準拠効果）。この傾向を活用し、高校生自身や、高校生が最近経験したと思われるできごとなどに着目した問いを投げかけ、少しの間考えてもらおうとよいだろう（「皆さんが～した時のことを思い出してみてください」、「皆さんはどんな時に～しますか」、「皆さんは賛成ですか」、「皆さんだったらどう感じますか」など）。

③パワーポイント資料は画像を中心に

「百聞は一見に如かず」の諺どおり、文字情報よりも画像情報の方が記憶に残りやすいことが知られている（画像優位性効果）。イラストや動画を見せるだけでなく、「イメージを思い浮かべてもらおう」だけでも効果があるとの研究も報告されている。また、資料の文章を読んで理解することと、教員の説明を聞いて理解することを同時並行で行うことは負担となる。したがってパワーポイント資料では、文章の使用は極力控え、語りの理解を促す画像イメージや図表を中心に呈示

方がよいだろう。また、言語的に解説する際には、聞いている受講生が視覚的なイメージを思い描けるような具体的な表現を用いるよう意識することも効果的である。

④「参加」の要素を取り入れる

何らかの形で受講生が参加する授業は、一方向に情報を伝える講義と比べて教育効果が高いと考えられている。

体験授業の時間が15分程度の場合、グループワークのような参加体験型のアクティビティは難しいが、たとえば「問いを投げかけて考えてもらった後、数人に答えてもらう」、「選択肢を示して挙手してもらう」といったシンプルな手法であれば、どんな授業にも取り入れることができる。このように、正解を知る前に自分で考えたことは、教員がただ話したことよりよく記憶される傾向があり、生成効果（答えを生成させるプロセスの効果）と呼ばれている。

「生徒とのコミュニケーションを上手にとることができる」、「授業に参加させるのが上手」との項目が魅力的な教師像としてあげられており（表2）、能動的教育の充実が、高校生の半数近くが重視している（ベネッセ教育総合研究所、2013）ことから、体験授業にはできる限り「参加」の要素を含めた方がよいだろう。

3.4 「どのような教員が」伝えるか：担当教員に求められる特性

通常の授業に関する限り、特定の科目をどのような性格や行動特性をもった教員が担当すべきかについて議論されることはほとんどないと言ってよいだろう。大学が教員を評価する公的な基準は主として研究業績と教育歴であり、性格や行動特性といった個人的資質が判断基準とされることは、少なくとも表向きはない。人柄や学生からの人気が考慮される実態があるとしても副次的な要因としてであろう。

しかし体験授業の場合、大学生に学術的知見を伝えるのではなく、限られた時間内に、高校生が「おもしろい」「こんな授業なら受けてみたい」と思える内容を提供することが主たるねらいであることから、性格的要因を考慮し、適性のある教員が担当するという発想も必要ではないだろうか。

表2に示した高校生にとって魅力的な教師像のうち、教員の性格・行動傾向に関わる項目としては、「誰に対しても笑顔で明るくかかわる」、「授業に全力で取り組む」、「生徒の成長に喜びを感じる」があげられている。このことから、体験授業の担当者として適任なのは、学生と関わるが好きであり、明るく笑顔で学生と接しており、授業から熱意が伝わる教員だと考えられる。

このような視点で体験授業の担当者を選定することについては、大学の授業の実態を反映していない（高校生ウケする部分のみを見せている）といった指摘や、業務負担の公平性などの観点からの批判も予想される。しかし、オープンキャンパスの目的に鑑みるならば、学生から上述の特徴を備えていると評価されている教員に優先的に担当を依頼することについて、積極的に検討すべきと思われる。

4. おわりに：教員にとっての体験授業の意義について

オープンキャンパスの目的、来場者のニーズをもとに、オープンキャンパスにおける体験授業のあり方について論じた。

冒頭で触れたように、大学教員から見ると、体験授業は本業以外に課される業務（負担）の1つである。そもそも大学教員のほとんどはオープンキャンパスに関わるタスクを望んで引き受けているとは言い難く、学生募集のためにやむを得ず協力している（させられている）のが本音である。

体験授業、「授業」と名はつくものの、「教育」機会ではなく「広報」の一環であるとの理解が一般的だろう。広報目的の体験授業をめぐるのは、関係する教員の心の内に、たとえば次のような思いが交錯している可能性がある。

- ・自らの専門性を背景とした知識や技能を、大学生への教育目的ではなく、学生募集のために切り売りさせられていることへの抵抗感・割り切れなさ
- ・高校生ウケする部分だけを切り取って伝えていることによる物足りなさ、不全感
- ・一部の高校生ウケする先生を「客寄せ」に利用しているような後ろめたさ
- ・自分の体験授業が他教員と比べて不評であるかもしれないことへのおそれ・不安
- ・研究者・教育者としての自負にもかかわらず、広報目的の授業には不向きと感じる（またはみなされる）ことによるコンプレックス、不満、より適任と思われる教員への嫉み、反感

こうした心情を完全に排除することは難しく、また排除することが適切とも限らない。しかしながら、体験授業を目の前の高校生を入学に導くための広報活動としてではなく、入学しないかもしれない来場者も含めた高校生への教育機会ととらえることは、心的葛藤を持ちこたえることに多少とも寄与しそうである。古閑（2008）は、オープンキャンパスにおける模擬授業を、社会貢献の機会（教育、研究とともに大学人としての義務）とみなす視点に言及している。たとえ目の前の高校生が、当の大学を進学先として選ばないとしても、未来を生きる彼らに貴重な体験として記憶してもらえれば、有意義な時間になるとの考え方である。

体験授業に携わる教員一人一人が、心的葛藤を抱えつつ、同時に意義を見出していく努力そのものが、体験授業の質を高めるであろうことを期待したい。

謝辞

本稿第2章のオープンキャンパスの目的に関する考察の記述に際し、柴沼真先生（城西大学経営学部・教職課程センター）のご助言を参考にいたしました。記して感謝申し上げます。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所（2013）「特集 教学改革を『選ばれた大学』の要因とするために」『VIEW21』 大学版 2013年度 Vol.2 冬号, 2-22.
- 学研教育総合研究所（2018）『高校生白書Web版「高校生の日常生活・学習に関する調査」』（<https://www.gakken.co.jp/kyouikusouken/whitepaper/h201809/chapter9/03.html>）（2022年8月22日）
- 細川 裕司（2015）「魅力ある教師についての研究：教育実習生と高校生の視点からみた教師像」『工学教育研究講演会講演論文集』, 504-505.
- 勝田みな（2016）「オープンキャンパス参加者の交流を活性化するための指導プログラムの検証」『子ども学研究論集』 8, 61-74.
- 河合塾KeiNet（2021）『私立大 定員割れ大学の割合が大きく情報』（<https://www.keinet.ne.jp/exam/topic/21/20211001.pdf>）（2022年8月22日）
- 小島理絵（2010a）「オープンキャンパス考—上—大学の何を伝えるかオープンキャンパスの成り立ち」『日本私立大学協会教育学術オンライン』 第2402号.
- 小島理絵（2010b）「オープンキャンパス考—下—戦略的なプログラムの開発を 参加者と在学者の学びの場に」『日本私立大学協会教育学術オンライン』 第2403号.
- 古閑博美（2008）「キャリア教育への一考察：入学者支援の一環としてのオープンキャンパスの活用」『嘉悦大学研究論集』 51（1）, 145-161.
- 小柴孝子・武田明典・村瀬公胤（2013）「中・高生が求める理想の教師像：『教職実践演習』カリキュラム開発のために」『神田外語大学紀要』 26, 489-569.
- 丸山遊（2018）「中学生が求める理想の教師像」『城西大学教職課程センター紀要』 3, 109-117.
- スタディプラス（2022）『2022年5月16日NEWS 高校生の約9割が大学選びで重視するのは「学びの内容」、都市圏は「ネームバリュー」、地方圏は「学費・奨学金」を重視する傾向』（<https://info.studyplus.co.jp/news>）（2022年8月22日）
- スタディサプリ（2021）『進学トレンド？先輩たちはどう選んだ？行きたい大学&学部・学科の選び方』（<https://shingakunet.com/journal/column/20210610000002/>）（2022年8月22日）
- 山下仁司（2012）「調査報告 高校生・大学生は大学に何を求めているのか」『VIEW21』 大学版2012特別号, 10-15.
- 山下仁司（2013）「調査報告 進学目的別に見る、選ばれた大学の特徴とは？」『VIEW21』 大学版2013年度 Vol.2 冬号, 2-7.
- 全国大学生協連（2022）『第57回大学生生活実態調査概要報告』（<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>）（2022年8月26日）